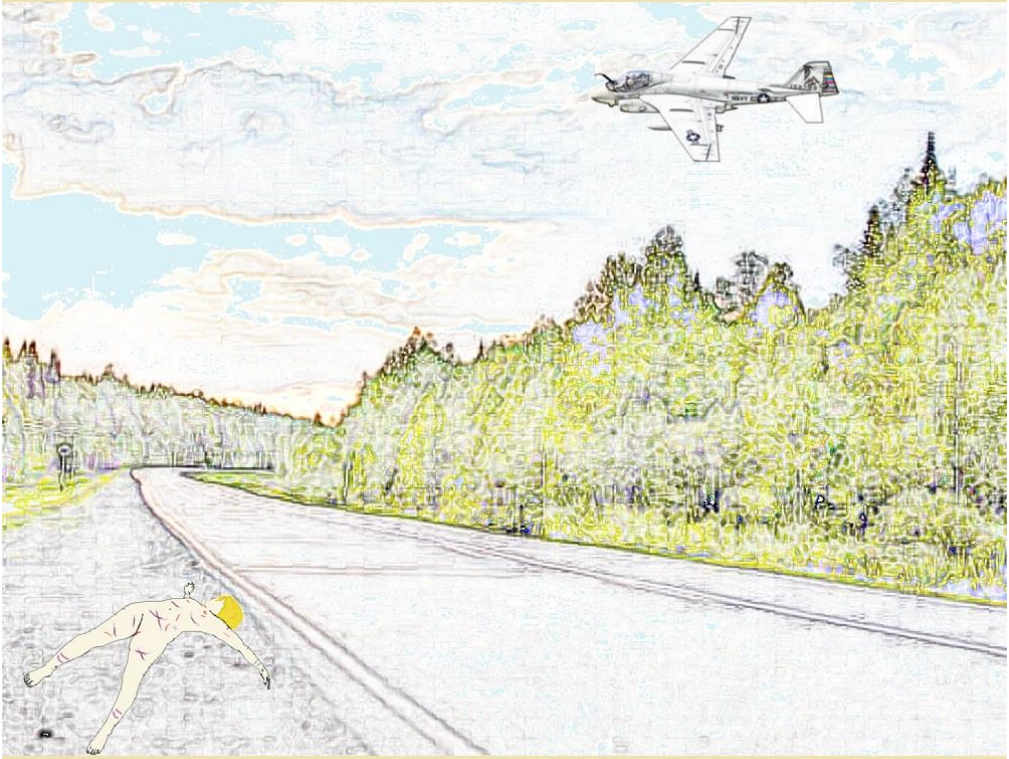
Zero Sum Short Stories 08

An Amateur Assasine Arrested And Assaulted



Horikado Nagayasu

目次

連続凌辱 ..... - 2 -
殴打尋問 ..... - 7 -
暗殺請負 ..... - 10 -
鞭打拷問 ..... - 14 -
電撃拷問 - 19 -
薬剤尋問 - 25 -
生物拷問 - 28 -
水没拷問 - 34 -
娼婦試験 - 42 -
絞首処分 - 47 -
望遠撮影 - 49 -
後書き - 52 -

An Amateur Assasine Arrested And Assaulted

連続凌辱

　壁も床も天井も真っ白な部屋。照明器具は無く、壁面自体が発光している。部屋の中央には、手術台を思わせる可動部を備えたベッドが設置されている。それが手術台で有り得ないのは、胴が乗る部分だけは幅がダブルベッドほどもあることと、全身を拘束するための革バンドが至るところに取り付けられていることで明白だった。

　部屋の調度は、それだけではない。Ｘ字形の柱、人体を水平にも垂直にも水没させられるだけの大きさがある全面アクリル板の水槽、さらには三角木馬や絞首台もある。天井には縦横に走行する小型のホイストクレーン。壁の一面には鞭や手錠やロープ、普通に大きいサイズのディルドから腕よりも太い物までが掛けられている。片隅の事務机には、電源ボックスと幾つもの電極。

　そして監視カメラが十台以上も、これはひっそりとレンズだけを覗かせている。

　そんなおどろおどろしい部屋に、今しも新しい生贄が連れ込まれてきたところだった。

　膝上４インチのおとなしい白衣のワンピース、巻いた金髪の上にちょこんと載っているナースキャップ。彼女が真性の看護婦に見えないしとしたら、着衣の上からも分かる肉感派女優顔負けの極上ボディと、口をダクトテープ（ポリエチレンコーティングされた銀色ないし灰色のガムテープ：強靭）でふさがれていても、それが被虐美でしかない美貌のせいだろう。

　後ろ手錠を掛けられて男二人に両腋を掴まれ、部屋に引きずり込まれた女はそのままベッドへ追い上げられた。女――いや、娘といったほうが当たっているだろう。恐怖に歪んでいる美貌には、それでもなお、未性熟のあどけなさが漂っている。

　娘はベッドの上で後ろ手錠を外され、後から部屋に入ってきた二人を加えて、四人がか

りで仰向けに押さえ込まれた。上下に引き伸ばされた娘の手足を、革バンドがひとつずつ固縛していく。娘は、まったく抵抗しない。悲鳴すらあげない。

四人の男たちも無言。ただてきぱきと娘を磔けていく。そして、大ぶりのナイフの刃を上向きにして、切っ先をナース服の胸元に差し込むと。

ピイイイッ……真っ二つに裁ち裂いた。

「んんんーっ！」

初めて娘が反応を示した。

男はかまわず、ブラジャーとショーツもナイフで布切れに変えていった。それから、娘の口を封じているダクトテープを引き剥がす。

娘は、しかし引き攣った表情で男を見上げるだけで、言葉を発さない。

男はおもむろに右手を振り上げると。

バシン！　バシン！

手加減のない往復ビンタを張った。

「きゃああっ……！」

凍りついていた娘の顔に表情が動いた。それは恐怖だったが――茫然自失から正気を取り戻した証拠ではあった。

男たちは、さらに娘の腰と胸にも革バンドを巻いて、身をよじることす封じた。

ウイィィィ……微かなモーター音とともに、ベッドが動いた。脚を拘束している部分が大きくＶ字形に開き、さらに膝の部分でΛの形状に屈曲する。

そして、男の一人がズボンを脱いで、すでに猛り勃っているペニスを露出すれば、その意図は明白だった。

「……」

レイプされそうになっている女性であれば当然の、拒否の訴えを娘は叫ばない。もちろん、受容しているのではない。両手を握り締め歯を食い縛って、目前に迫った暴辱に抗している。

「お願い……殺さないで」

いよいよペニスがヴァギナを貫こうとしたとき、娘の口から命乞いの言葉が漏れた。犯されるということは、すぐには殺されないと理解しての言葉だったかもしれない。

男が侮りの笑いをこぼした。

「少なくとも四回は殺してやるぜ」

「余計なことは言うな」

四人とも褐色の肌で筋骨逞しい。髪も一様にミリタリーカットで、年齢も三十前後。迷彩模様のズボンとカーキ色のタンクトップ。一人だけごついフレームのサングラスを掛けている男が、短くたしなめた。

「アイ、サー」

軍体調の、しかしおどけたイントネーションの返事と共に、娘におおいかぶさっている男は、腰をぐいと進めた。

「くうっ……」

娘はもちろん処女ではなかった。しかし、恐怖で干上がっているヴァギナへの挿入は、みずから望んで抱かれたロストバージンのときよりも、むしろ苦痛が著しかった。

男としても、乾いた粘膜同士の擦過に快楽は生まれないだろう。しかし、不快をこらえてピストン運動を続けるうちに、娘の粘膜は強制的に分泌させられる愛（など無い）液で潤ってくる。男の腰の動きがリズミカルになって。

ぱんぱんぱんぱん……

股間を打ち付ける音が静寂の部屋に響き始める。

娘は突き上げられるたびに、豊満な乳房を上下に揺すぶられる。

サングラスの男が腰をかがめて、いろんな角度から結合部を観察している。娘の（肉体的）反応を見定めようとしているのか。しかし、実行者に指示を与えたりはしなかった。

そして。三者ともに無言のまま——実行者が動きを止めて引き下がった。怒張を失ったペニスの先端からは白い糸を引いている。

ウイィィィ……腕の部分が左右に開いて、脚は水平に伸ばされる。脚の革バンドが一時的に解かれて足が引き上げられ、手首とひと括りにされた。娘の身体は、浮き上がった尻を頂点にしたV字形。

二人目の男がズボンを脱いでペニスを露出する。体格も顔つきも最初の男と似通っているが、明白な違いが二点だけあった。最初の男は首にぴったりの鎖で黄色い認識票（ドッグタグ）を鎖骨の間にぶら下げていたが、この男の認識票は青色だった。

そういえば、サングラスの認識票は白、最後の一人は赤だった。これが、四人を識別する最も確実な目印になっている。

それはともかく。最初にリンダを犯した黄色よりも、この青色のほうが、ペニスが明白にひとまわり大きい。ポルノビデオの主演男優になれる。男はそれを、今しがた強貫された穴のすぐ上で、まだ固く閉じている肉蕾に押し付けた。

「……アヌスは赦してください」

四回は殺すという意味を理解して、本来の意味で殺されることはなさそうだと安堵したのだろう。娘はようやく、犯されている女に相応しい言葉を口にした。

しかし、男は変わらずに無言。犯されてまだ開いている穴に指を突っ込んで分泌物を掬い取り、それを菫色の蕾になすりつけた。そして、無慈悲にペニスを押し込んだ。

「きひいいっ……痛い！　赦して……」

娘の哀願を無視して、男はいきなり荒腰を使い始めた。

「痛い……あうっ……いやああ！」

数分で、二人目の男も射精に至った。しかし、娘はまだ二回しか殺されていない。

娘はすべての革バンドを解かれて、ベッドから下ろされた。両手首を前で縛り合わされて、天井のホイストクレーンから垂れるフックにつながれた。

チャリリリリ……ウィンチが巻き上げられて、娘は両手を頭上に吊られ、さらに足が床から離れた。

サングラスの男が、部屋の隅の水栓から引っ張ったホースの先を娘に向けた。

ぶしゃあああああ……絞られたノズルから噴出する水流が、娘の下半身に叩きつけられる。
「ひいいっ……」
水流の当たった肌が凹むほどの水圧。正面からざっと水を浴びせておいて、男は後ろへまわった。ノズルを下げ斜め上向きにして、尻の谷間に水を浴びせる。アナルセックスで掻き出された汚れを洗っている。そのままノズルを尻に近づけ、ついには先端をアヌスに突っ込んだ。
「ぐぎいいい……」
見る見るうちに、娘の腹が膨らんでいく。事前の処置ならともかく、事後のこれは娘に苦痛を与えるだけの行為だった。
しかし、娘を執拗に責める意図はないらしく、臨月の妊婦には程遠いところでノズルを抜去した。
ぶしゃあああああ……奔流が床を叩き、幾つかの小さな塊も転がる。床に落ちた水は部屋の隅へ自然に流れて、壁と床の間のわずかな隙間へ吸い込まれていった。
サングラスもズボンを下ろして、勃起したペニスを露出する。最後の一人も彼に倣う。
四番手の赤色が娘の背後から足首をつかんで引き上げ、今度は垂直のV字形に娘を曲げた。両手を真っ直ぐ上に伸ばしているから、全体では下向きの矢印というべきか。
サングラスが娘の正面に、キスができそうなくらい身体を近づけ、右手でペニスを垂直に保ち、左手でヴァギナをくつろげる。
チャリ……チャリ……小刻みに娘の身体が下ろされていき、ペニスが娘の股間に突き刺さった。
サングラスが娘の足首をつかみ、背後の赤色は軽く膝を曲げて腰の高さを合わせ、伸び上がるようにして一気にアヌスを貫いた。
「ひいいい……」
娘の悲鳴はこれまでとは違って、幾分か艶めいていた。とはいえ……
ウィ、ウィ、ウィ、ウィ……二人の男は動かず、ウインチが娘の身体を小刻みに上下さ

せ始めると、肩に掛かる負荷とあいまって、娘の顔が苦痛に歪んでいく。

足首をつかんでいるサングラスが、娘の身体を上下動に合わせて左右にひねる。二本のペニスで前後ともぎちぎちになっているところを、さらにこねくられて。

「ひいっ、痛い……ああん……裂けてしまうう」

苦痛を訴える声が、すこしずつ蕩けていく。

ウィンチの上下動は、男が欲望のままに衝き動かす荒腰に比べれば緩慢なので――十分近くも娘は揺すぶられ続けた。

その途中で、五人目の男が部屋に入ってきた。裸体のあふれる中で、ひとりだけスーツを着ている。白人だった。

「ミスターＺは蘇生した。処置が早かったので、後遺症の懸念も無い」

それを聞いて四人の男たちが頷く。

「では、この娘は処刑せずに……？」

「必要な情報を聞き出した後は『なんでも有り（anything OK）』の娼館で罪を償わせてやろう」

白人の男は事務的に答えて、部屋のドアを閉ざした。

「では、次のフェーズに移行しよう」

二人の男が、ウィンチの上下動に合わせてみずからも腰を使い始めた。示し合わせて同時に射精して。これで少なくとも四回、娘は殺されたことになる。

そして、これからが――拷問の幕開けなのだった。

殴打尋問

男たちが娘の身体から離れると、娘は両手だけで天井から吊られた形になる。時すでに遅しの感はあるが、娘は片脚を曲げて内側へよじり、すこしでも股間を男たちの目から隠そうとした。

「おまえの名前は？」

　サングラスが、初めて娘に質問をした。

「アン・アザウェイ」

　娘は素直に答えた。偽造ＩＤカードでこのビルに侵入したのだが、そこに書かれてある名前は本名だった。

「年齢は？」

「１９歳」

「どこに住んでいる？」

「サンシャイン・アパート３１８、オークアベニュー五番、グレンモアシティ」

「看護婦資格は持っているのか」

「準看護婦です」

「勤め先は？」

「……」

　それまでは淀みなく答えていたアンが、ためらいを見せた。というよりも、答えを拒否した。

「この仕事を依頼したのは勤め先の誰かなのか？」

「違います！」

　あまりに切迫した口調だったので、嘘なのは明白だった。しかし、尋問者はそれを指摘しなかった。

「もう一度だけ尋ねるぞ。勤め先を言え。その雇い主に、暗殺を命じられたのだな？」

「……違います」

　あるいは、隠し通せないと観念しているのかもしれない。それでも、自白出来ない理由が、彼女にはあった。

「そうか。喋りたくないのなら、喋らなくていいぞ」

「……？」

予想外の言葉に、アンは戸惑った。

尋問者は後ろに一歩下がった。と同時に……

ぼすん！

「ぐええっ……」

腹にストレートを叩きこまれて、アンは頭をうつむけて呻いた。立っていれば両手で腹を抱えて倒れ込むところだが、吊るされていてはそれも出来ない。

ぼすん！　ぼすん！　ぼすん！

「ぐべへっ……うえええええ！」

腹筋を固める暇もなく立て続けにパンチを叩きこまれて、アンは口から胃液を噴きこぼした。必死に曲げていた片脚もだらんと垂れ下がる。

尋問者はボクシングのファイティングポーズに構えて。

バシン！　バシン！　バシン！　バシン！

乳房にフックを打ち込んだ。乳房が横ざまに吹っ飛び、身体もねじれる。アンは悲鳴を上げる息さえ出来ない。

「勤め先を言え」

尋問者が後ろへ下がって、平板な声で質問を繰り返した。

「……」

「おまえの顔写真を手掛かりに、ビッグデータを検索するか昔ながらに足を使って調べるか――勤め先を割り出すくらいは簡単だ。どちらも手間だから、おまえに尋ねているだけだ。隠しても意味はない。おまえが痛い目に遭うだけだぞ」

「……」

アンは顔を上げて、尋問者に焦点の合わない目を向けた。

「組織（シンジケート）からの報復を恐れて口を閉ざしているのか？　素直に白状すれば、こっちの組織で庇護してやる。ミスターの言葉を聞いていただろう。おまえは組織で経営している娼館で働かせてやろう。ギャングバング、サド、マゾ、メッシー、レズビアン、ベスティアリ

ティ――なんでもＯＫの娼婦としてな」
　アンが、ぶるっと怖気を震った。
「安楽死を望むなら、希望を叶えてやってもいいぞ。生きたまま皮を剥がれ、焼鏝を当てられ、手足をひとつずつ切り取られていくよりは、ずっと安らかな死を与えてやる」
　そんな言葉を聞かされて、自白しようと考える者がいるだろうか。アンは頑なに口を閉ざすばかりだった。
「そうか。娼婦も厭、安楽死も厭か。せいぜい、生き地獄を味わうがいい」
　尋問者は一歩下がった位置から、そのまま回し蹴りを放った。
　どすん！
「うぐっ……！」
　肝臓に足の甲を叩きこまれて、アンの顔が苦悶に歪んだ。蹴られた反動で、身体がゆっくりと回る。百八十度回ったところで、腎臓に蹴りを入れられた。
「ぐぶっ……！」
　そこからは、まったくの人間サンドバッグだった。腹にストレートを突き入れられ、乳房を左右のフックでパンチングボールさながらに揺すぶられ、太腿をローキックで痛めつけられる。頭を垂れると、顔まで容赦なく殴られた。
　アンは何度も胃液を噴きこぼし、全身を痣だらけにして、ついに意識を失った。
「しばらく休ませてやるか。体力を回復させて、今度こそたっぷりと悲鳴を絞り出してやろう」
　四人の男たちが、部屋から出て行って。アンは吊るされたまま、白い部屋に放置された。

暗殺請負

　アンの家族は、いわゆるラストベルトに住んでいた。半世紀前の繁栄は廃工場の機械類

とともに錆び付き、今や全米で屈指の失業率を誇るばかり。両親はアルバイトと変わらない短期の仕事と、その合間は政府の扶助で食いつないでいた。

アンはハイスクールには進学せず、ナーシングスクールを選んだ。最短の二年で準看護師の資格を取った。新米でも三万五千ドルの年収が見込める。生活を切り詰めれば、妹のローラをハイスクールへ通わせることも可能――なはずだったが。地元での給料は二万ドルにも満たなかった。

一年前には、ささやかなアメリカンドリームを求めて、東部の都会へ出て来た。しかし求人は多いものの、求められるキャリアもレベルが高かった。準看護婦としてではなく、看護助手のような時給十ドルにも満たないアルバイト同然の仕事で窮乏生活に甘んじていた。だから。ジョブエージェントから年収で四万ドルの仕事をオファーされたときは、即決で返事をして、一晩寝てから、それが夢でなかったことを確かめたほどだった。場合によってはイリーガルなオペレーション（という表現を雇用主は使った）もしてもらう。そんな条件も、たいして気に掛けなかった。堕胎にせよ移植にせよ安楽死にせよ、州法に抵触する医療行為は、アン自身これまで何度も耳にしてきただけでなく、手を染めたこともあった。

Dr.マーチン・クリニックでの勤務は時間がイレギュラーだったが、肉体的には楽な仕事だった。マーチン医師は診療所を構えてはいるが、患者の大半は自宅療養のセレブだったので、訪問医療の介助がアンの主な仕事だった。往復の車中は休憩の延長みたいなものだった。ときには、正看護師でも禁じられているような医療行為もさせられたが、事故を起こしたりはしなかった。これが、つまりはイリーガルなオペレーションだと思っていたアンだったが。

「次の患者は、きみ一人で処置してくれ」

患者の入院している病院に入るためのＩＤカードと、ケース入りの注射器を渡された。点滴にその薬品を注入するという、それだけの仕事だったが。

「ボーナスとして一万ドルを先払いしてあげよう」

まともな医療行為でないことは明白だった。

「その患者に長生きされると困る人間がたくさん居るのだ」

安楽死どころではない、第一級の殺人行為だった。

「しばらく考えさせてください」

アンの倫理観は殺人を峻拒していた。善良な市民としては当然だった。しかし――彼女が断わっても、マーチンは別の人材を見出だすだろう。警察に訴えるにも、証拠が無い。そして『仕事』を断われば――四万ドルの年収を失うに決まっている。どころか、その注射器が彼女に使われるかもしれない。

「駄目だ。緊急を要する『治療』なのだ。イエスかノーか、この場で決めなさい」

アンは、先に述べた理由に五万ドルを上乗せして、自身の倫理観をねじ伏せたのだった。

「承諾してくれて嬉しいよ」

マーチンはアンの目の前で、彼女の口座に一万ドルを振り込んだ。だけでなく。

「きみはご両親や妹さんにも仕送りをしているんだってね。一万ドルとは別に、それぞれ一千ドルずつ、きみの名義で振り込んであげる。ポール・アザウェイ。ハットマン銀行、５４１１８１８。住所はブロンコ地区２４－１７、グリーンシティ、インディアナ州。妹さんは……」

アンはマーチンの善意に感謝するのではなく、悪意におののいた。もしもアンが裏切れば、本人だけでなく家族にも危害を及ぼす。暗にそう脅されていると思ったのだ。そうでなければ、住所まで言う必要はない。

「警察であれ、患者の属している組織（シンジケート）であれ、私の名前を漏らしてくれると、私もきみも、大変に困ったことになるよ。そのつもりで、仕事を果たしてくれたまえ」

イエスと言わなければよかったと、アンは後悔した。しかし断わっていても、家族を人質に取られて、無理強いに承諾させられていただろう。四万ドルに飛びついた時点で、運命は定まっていたのだと、自分を慰めるしかなかった。

しかし、それがどんなに残酷な運命であるかを、アンはまだ知らなかった。

アンは注射器のケースをヴァギナに忍ばせて、ビルの職員通用門を通過した。内部構造は（必要な箇所だけ）頭に入っている。ロッカールームで備え付けの白衣に着替えて、ヴァギナから取り出したケースはポケットに収めて。

このビルはさる『同業他社』の根城だが、１Ｆから８Ｆまでは総合病院の体裁を整えているので、医師や看護婦の往来は当然だった。ナース服を着てＩＤカードを首から下げていれば、誰にも怪しまれることもなく、目的の部屋まで辿り着けた。

患者は６３歳の男性。もうじゅうぶんに生きたと、１９歳の娘は思う。それが、罪の意識を薄めていた。

アンは輸液ラインを閉じて側管に注射器をつないだ。ゆっくりとシリンジを押して、患者に薬品を注入する。遅効性の毒が効果を発揮するまでに十五分。ロッカールームへ戻って私服に着替えてビルから脱出するにはじゅうぶんな時間があるはずだったが……

「うぐぁ……く、苦しい」

注入を終える前から、患者が苦しみ始めた。目の前にいるアンには目もくれず、枕の横に垂れているナースコールを押した。

「がああああっ……！」

ナースコールをつかんだまま悶え苦しむ患者を目の前にして、アンはパニックに陥った。

十秒かそこらで看護婦が駆け付けてきて。

「あなた、誰なの？　何をしているの？　誰か！　エマージェンシイ！」

金切り声で叫ぶ。やはり十秒ほどのタイムラグで、医師と看護助手らしい屈強な男とが駆け付けた。

「その女を確保しろ。引きずり出せ」

医師の指示で看護助手がアンを羽交い絞めにして部屋の外へ連れ出した。部屋の外には、すでに四人の男たちが待ち受けていた。アンは口にダクトテープを貼られ後ろ手錠を掛けられると、男の肩に担がれて――エレベーターへと運び込まれた。

予期しなかった患者の断末魔に直面したパニックはアンから去っていたが、いっそうのパニックに襲われていた。イリーガルなオペレーション、つまり暗殺の失敗。そして、どう見ても警官でも警備員でもなさそうな男たちに拉致されている。これから自分の身に何が起きるのか、最悪の予想ばかりが頭の中で渦巻いているのだった。

鞭打拷問

アンが意識を取り戻したとき、まだ両手を縛られて吊るされていた――だけでなく、さらに恥辱的な拘束が付け加えられていた。３フィートほどの金属棒の両端に手錠の片方ずつを取り付けた足枷が、開脚を強いていた。

部屋の中には、二人の男がいた。白い認識票のサングラスは部屋の隅でパイプ椅子に腰掛けている。正面に立った、アンのアナルヴァージンを奪った青色の認識票は、長い一本鞭を輪に巻いて手に持っている。

「おまえの名前と住所は裏付けを取った」

サングラスが口を開いた。

「勤務先もすぐに分かった。しかし、彼が依頼主の筈もないな。いったい、誰に頼まれたんだ？」

「……」

アンは沈黙を続けながら、男の言葉の意味を考えてみた。

勤め先を突き止められたときは、万事休すだと覚悟した。けれど、この連中はマーチンが依頼主ではないと断定している。勘繰れば、組織（シンジケート）内での抗争に巻き込まれたのかもしれない。今の段階では、依頼主が誰なのか、この連中は知らないということだ。

つまり。アンの家族がマーチンの報復に曝されることはない。けれど。依頼主の名前を知ろうとして、この連中は自分をもっとひどい拷問に掛けるだろう。

果たして。青色の男が、輪にしていた鞭を床に垂らした。黒い皮革を編み上げた一本鞭は８フィートもの長さがあった。だんだんと細くなっているが、先端には針金が編み込まれていて、団栗形に膨らんでいる。

男が鞭を水平に振るう。

しゅんんっ……バヂイン！

鞭は脇腹に巻き付いて一周してから、先端の針金が肌を引き裂いた。

「ぎゃあああっ……！」

野獣が咆えるような悲鳴を、アンが噴きこぼした。人間サンドバッグにされていたときの低い呻き声とは、まるで違っていた。

男が力任せに鞭を引き戻す。アンの裸身がゆっくり回りながら、鞭が肌から剥がれた。

しゅんんっ……バヂイン！

「ぎひいいっ……！」

バックハンドで逆向きに鞭を叩きこまれて、ふたたび悲鳴をあげる。

「くううう……」

鞭打たれる瞬間の爆発的な痛み。鞭を引き戻されるときに、より深く肌を切り裂かれる鋭利な痛み。アンの腰には、真っ赤なベルトを巻いたような切り傷が刻まれた。

「これくらいでは、まだ喋る気にならないかね？」

サングラスが横合いから近づいて、アンの傷を念入りに眺める。

正面の青色が鞭を床に這わせた。真っ直ぐに伸びた鞭の先端は、アンの股間の直下にきている。

「私が自白したら、家族まで危害を加えられるんです。もしも、あなた方が家族を保護してくれるのなら、真実を話してもいいです」

窮余の一策だったが、アンの言葉は男たちに効果的な拷問のヒントを与えたに過ぎなかった。

「そうか。では、おまえが自白しないのなら、家族も誘拐して拷問に掛けてやろう」

「ノオオッ……！」

「妹はローラといったな。まだ１４歳だったか。バージンだろうな。俺たち四人でギャングバングに掛けるか、逆さ吊りにして鞭で処女膜を切り裂いてやるか……」

「妹は関係ない。パパもママも……巻き込まないで」

「おや？　最初に家族の話をしたのは、おまえだったぞ」

　アンは、ますます追い込まれる。

「だから……家族を保護してくれれば……」

「そうだな。母親は３６だったか。まだ使えるな。三人まとめて『なんでも有り（anything OK）』の娼館で保護してやってもいいぞ。父親は……」

　サングラスは喉に親指を当てて、横に掻き切るジェスチャーをした。

「四人のうち三人が生き残れば、上出来だとは思わないか？」

「……」

　アンは唇を噛んで、サングラスを睨みつけた。それくらいの気力は、まだ残っている。

「まあ、家族を人質に取るのは最終手段だ。しばらくは、おまえの身体に尋ねるとしよう」

　青色の男が鞭をうねらせて宙に浮かし、素早く引き戻す。そのまま腕を後ろに引いて。

　しゅんんっ……バッシュンン！

「ぎゃわ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っ……！」

　アンは背中を反り返らせて絶叫した。開脚させられている金属棒に抗い、膝を折り曲げて内腿を閉じ合わせようとする。

「あうううう……」

　膝が砕けて踵が浮き、かろうじて床に着いている爪先は体重を支えていない。鞭の先端に付いたフックで抉られたヴァギナからは血が滴っている。

　青色がアンに近寄って、足を広げている金属棒を蹴った。ゆっくりとアンの身体が回り始める。青色は元の位置に戻って鞭を構え、アンが後ろ向きになったところで。

　しゅんんっ……バヂイン！

「きゃああっ……」

尻に横一文字の赤い線が刻まれた。

さらに一回転したところで、バックハンドの二発目が叩き込まれる。

「ひいい……」

ヴァギナに打ち込まれる鞭に比べれば、まだしも耐えられなくはなかった。

バヂイン！　バヂイン！　バヂイン！　バヂイン！

ちょうど十発で、青色は手を休めた。アンの尻はずたずたに切り裂かれている。

サングラスがさらに近づいて、上から下まで正面側面背面と舐めまわすように傷を観察する。

「しぶといな。すこし考える時間を与えてやろう」

それは、しかし拷問の中断を意味していなかった。青色が一本鞭を壁掛に戻して、バラ鞭を取り出した。ＳＭプレイで使う玩具ではない。細い革紐を撚り合わせて先端から１フィートのところまでは、五つの結び瘤が作られている。キャトゥナインテイルそのものだった。

アンの身体が、またゆっくりと回される。青色は一本鞭のときよりもずっと距離を詰めてアンの前に立って、続けざまに鞭を振るった。

バシン！　バシン！　バシン！　バシン！　バシン！

一本鞭で刻まれた深く鮮明な傷痕を飾り立てるように、全身が赤い不鮮明な打痕で埋められていく。

一本鞭に比べれば一発ごとの痛みはずっと小さい。アンはわずかに呻くだけで、鞭の蹂躙に甘んじている。それでも鞭打たれるたびに、びくんびくんと裸身を振るわせていたのだが――十分もすると、その反応も弱々しくなった。

バシイン！

ひときわ強烈な一撃を股間に叩き込まれても、わずかに内腿をひくつかせるだけだった。

「ぼつぼつ白状する気にはならないかね？」

サングラスの問い掛けにも、アンは首を垂れたまま――返事をする気力すら奪われていた。

「ふむ。では、しばらく時間をおいてから、別の説得方法を試みるとしよう」

サングラスが立ち上がって、事務机の抽斗からスプレー缶を取り出した。

「傷の手当は、しておいてやろう。せめて出血が止まらんことには、絵面も良くないし後始末が大変だからな」

スプレーをアンに噴き掛ける。

「ぎびひいいいっっ……！」

一本鞭で打たれたときと同じくらいに凄絶な悲鳴をアンが噴きこぼした。

「痛い……沁みる……痛いいい！」

「殺菌と止血に抜群の効果がある薬だ。細胞を賦活させる刺激成分もたっぷりだから、傷の治りも早いぞ」

歯を剥きだして笑いながらアンの全身に噴霧して、たっぷりと悲鳴を引き出してから。正面にしゃがみ込んで、スプレー缶を斜め上向きに構える。

「いや……そこは……ぎゃわ゛あ゛あ゛あ゛っっ！」

間近からヴァギナに噴霧されて、アンが猛獣の断末魔を咆えた。肺の空気を吐き切ると、がくんと首を垂れる。

スプレーは鞭とは違って、激痛の最大値が何分も続く。全身に針を突き刺されながら炎で炙られているような鋭い灼熱に、失神の安逸に逃れることも叶わず、全身をよじり腰をくねらせ、苦痛から逃れようと藻掻き続ける。

そんなアンを吊るしたまま、二人の男は部屋を出て行った。

自白したほうがいいんだろうか……？

激痛に悶えながら、アンはそれを考えていた。

自白すれば、とりあえず命は長らえる。といっても、なんでもあり（anything OK）の娼館で強制的に働

かされれば、ことにサディストの客ばかりあてがわれたら、じきに壊されてしまうのではないだろうか。でも、ともかくも、これ以上の拷問は免れる。サングラスは「別の説得方法」と言っていたけれど。この部屋にある凶悪な拷問道具は、どれもこれも鞭打ち以上に残虐なのだろう。もしかしたら、絶命する前に発狂するかもしれない。

自分のことだけではない。自白すれば、この男たちが家族を拐って拷問に掛けたり、父を殺して母と妹を非合法の娼館へ落としたりはしない。けれど、マーチンの手で……おそらく殺されるだろう。この男たちもマーチンも、マフィアの類なのだろう。マフィアの報復は残忍きわまりない。

それとも。マーチンが報復の挙に出る前に、こっちの組織に消されるだろうか。いや、マーチンが殺されても、彼の属している組織が家族に報復するだろう。

自白してもしなくても、自分も家族も絶望だ。

でも……自白しなかったときの結果は、確定しているけれど。自白したときには、家族の運命には幾つかの未確定要素がある。それなら……自白して、自分の当面の命を救うべきかもしれない。

だいいち。マーチンは家族に報復すると明言してはいない。におわせただけだ。ただの脅しかもしれない。そんなふうにアンの思念は傾いていった。